

同 志 社 大 学

2009 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2010 年 3 月 15 日提出

所 属	職 名	氏 名
文	教 授	石 塚 則 子
研 究 題 目	20 世紀転換期のアメリカ文学研究 オンライン・チャットによる英語学習と異文化理解	
研 究 成 果 の 概 要	<p>第 46 回日本アメリカ文学会全国大会（2007 年 10 月 13-14 日 於 広島経済大学）のシンポジウム II「共振する／交錯するメディアとアメリカ文学」を発展させた論文集が企画され、イーディス・ウォートンと同時代のフェミニスト、シャーロット・パーキンス・ギルマンの雑誌とユートピア小説についての論考「シャーロット・パーキンス・ギルマンのメディア戦略—雑誌『フォーランナー』とユートピア小説『ハーランド』」を 2009 年 2 月に纏めた。その後、一部加筆・修正、編集・校正作業を経て、今年度 10 月 30 日英宝社より刊行された『メディアと文学が表象するアメリカ』（394 ページ）の中に 14 本の掲載論文のひとつとして収録された。</p> <p>2006 年 3 月に論文として発表したイーディス・ウォートンの <i>The Buccaneers</i> (1938) 論では、ウォートンの絶筆となった作品を取り上げた。この論考から派生したテーマとして、ウォートンの最晩年の作品と自伝を取り上げ、第 52 回日本アメリカ文学会関西支部大会のフォーラム「アメリカ文学における老いの諸相」（2008 年 12 月 6 日（土） 於 甲南大学）にて、パネラー（4 名）の一人として“Edith Wharton’s Backward Glance in ‘All Souls’ ”という演題で発表した。これまでその歴史的・文化的背景から「若さ」や「未来志向」がアメリカ文学の特徴とされてきたが、最近、「老い」がアメリカ文学においてどのように描かれているのか、また作家と老いの関係性が注目されるようになってきた。（このテーマで 3 名の研究者と科研費を申請した。）現在、ウォートンの晩年の短編作品をいくつか取り上げながら、ウォートンが「老い」をどのように作品に投影しているか、自伝との関連性も含めて論文として纏めているところである。</p> <p>1995 年度よりオーストラリアのウーロンゴン大学と行っているオンライン・チャットについて、今までの成果と今後の問題点を検証し、異文化理解学習と語学教育の道具としてのその有効性について、オーストラリア側の担当者であるウーロンゴン大学の斎藤律子氏と共同研究の形で進めてきた。今年度も研究発表をする予定であったが、オーストラリアの斎藤氏が自己都合で急遽退職され、予定していた研究が進められなかった。授業では、より異文化理解学習を進化させるために、課題の内容やトピックの選択などに従来とは違った方法を試みた。この点についても、今後分析する予定である。</p>	